

学会報告

第10回国際視能矯正学会に参加して

眼科 中山 茂子
(視能訓練士)

平成16年11月14日から17日にかけてオーストラリア（メルボルン市）にて第10回国際視能矯正学会（International Orthoptic Congress, 以下I.O.C.と記す）が開催されましたので、その報告をさせていただきます。I.O.C.は4年に1度開催され、8年前には我が国京都にて行われました。今回の開催地メルボルン市は人口330万人を擁するオーストラリア第二の大都市であり、キャンベラができるまではオーストラリアの首都でした。基盤の目状になった都心にはビクトリア様式の重々しい建物が並び、トラム（市電）が音を鳴らしながら市街地を走り抜ける姿は代表的光景となっています。春先から夏にかけての季節でしたので通常は曇りがちで時々雨が降る天候とのことでしたが、開催中は珍しく晴天続きとなり恵まれた日となりました。

先ずI.O.C.開催の経緯を説明しますと、1967年イギリスの視能矯正協会が第一回のI.O.C.を主催したとき国際視能矯正協会（I.O.A.）の設立を提唱し英国法のもとに1974年にI.O.A.が法人化されました。現在19か国で組織されています。

その目的は、1. 視能矯正学の科学・技術・視能矯正学に関連性のある重要なデータの発行、世界的な用語統一の促進。2. 世界中に視能矯正学の実践を広め発達させるための各国の組織や個人に対し、情報や助言を提供する。3. 視能矯正学における視能訓練士自身のトレーニングすなわち知識の向上および技術のより高い水準を目指す。4. 視能矯正学に関する国際学会や視能矯正学の実践、視能矯正学の科学の知識にかかわる会合などを組織する。以上の目的を遂行する上での大きな事業として、I.O.C.は開催されてきました。

そして視能矯正学とは、眼科学のうち視覚の検査診断の理論と実際を実践し視機能障害の機能回復を専門とする分野です。この学問は神経科学を基礎として進歩しており、視覚機構の解明や弱視

斜視疾患の病理生理、両眼視機能の発生機序等について基礎的研究や臨床的研究を行う科学分野です。この分野にて活躍する者が視能訓練士です。欧米では60年から70年の歴史を持ち社会的貢献度は大きなものとなっています。一方日本においては国家資格制度ができて約30年になり社会に対しての貢献と共に信頼も得られてきました。視能訓練士は弱視斜視の早期発見・予防・訓練・治療管理、また中高齢者の視機能管理を専門とする立場にあります。眼疾患を持つ社会的弱視においては、残された視機能を有効に使う方法をリハビリテーション医学の面から、また医療福祉の面から研究を積んでいます。

I.O.C.はこれら全てを網羅した視能矯正学についての発表、学術展示およびそれに関する討論を行い新しい知識を交換することを目的とする学術会議であります。また研究・教育・臨床等に用いる新しい機器の展示も行い最先端の知識を国際的に広めようとするものです。

今回3日間にわたるセッションの中から特に関心を抱いた弱視治療について説明させていただきます。弱視の治療法として、視力に左右差がある場合は良好な目にアイパッチと呼ばれるもので覆い隠し良好でない方の目を積極的に訓練することがあげられます。その際に両親に対し、子供の視力低下に影響があるのでアイパッチ訓練の必要性を十分に説明し、両親からの同意を得られるよう心掛けることを強調されていました。同意が得られるか否かで治療法が異なるということです。アイパッチをすることにより社交上苦痛となる場合在宅中のみの訓練、又はアイパッチの代わりにアトロピン（散瞳剤）の使用等子供の生活に応じて方法を選ぶ事や心理的・社会的・経済的圧力がかかる場合、家族周囲の方々と協力して弱視訓練を続けることが必要と訴えていました。

「弱視訓練は視能訓練士の情熱に委ねられてい

る。」という言葉があります。この学会参加によりもう一度基礎を見直し仕事に忠実であろうと思

いました。4年後のベルギー（アントワープ）開催に参加できればと思いを馳せています。